

ベンジャミン・キーチによる『悪魔との闘い』の出版と読者

高野美千代

The Publication and the Readership of *War with the Devil* by Benjamin Keach

TAKANO Michiyo

Abstract

One of the major nonconformist writers of the seventeenth century, Benjamin Keach, wrote several imaginative literary works. Among them, *War with the Devil* was the most successful. In spite of the fact that this work has not been read much in the last couple of centuries, it was enormously popular in the seventeenth and eighteenth centuries in England. This study examines the background of the publication of *War with the Devil*, and its readership, with references to contemporary literature of the same vein. Although Keach was not as masterful a writer as Milton or Bunyan, he had a special talent in attracting and educating young people with his imaginative literature. His target readership for *War with the Devil* was most probably teenagers. He knew very well that this age group was prone to turn away from religion and he hoped to strengthen their religious faith with his book. Judging from the number of editions or impressions, we can say that the publication of *War with the Devil* was a success. It also influenced other writers for young people, and contributed to the future success of this genre of literature.

キーワード：ベンジャミン・キーチ、『悪魔との闘い』、非国教徒文学

key words: Benjamin Keach, *War with the Devil*, nonconformist literature

はじめに

英文学史上、現在では触れられることが稀であるが、ベンジャミン・キーチ (Benjamin Keach, 1640-1704) は、17世紀後半から英国で大変な人気を博した非国教徒作家の代表格であった。キーチはバプテスト牧師であり、カテキズムや讃美歌を書いたことでは現在も言及される。そして現在に至るまで、バプテストとしてのキーチの宗教的思想やバプテストの歴史における彼の位置づけを扱う研究が主流となっている。¹⁾ 本論考においては、むしろ想像的文学の著者としてキーチをとらえて、彼の作品の意義がいかなるものであったのか、その一端を解明したい。

本論考で扱う『悪魔との戦い』(*War with the Devil*, 1673) は、キーチによる寓意的詩である。

ダイアログ形式のヒロイックカプレットで、幅広い読者層に合うように、読みやすい英語で書かれている。キーチは子どもの早期教育のために読本(primer)を執筆しているが、この作品も若年層から家庭向けに書かれたものである。『悪魔との戦い』は、1673年から18世紀末に至るまで繰り返し版を重ねた。*English Short Title Catalogue* (ESTC)によると、書籍商Benjamin Harrisが扱った版だけでも、半世紀の間に少なくとも18刷が世に出されている。単純にこの出版回数だけを見ても、この本が極めて長いこと熱く支持されたことが明らかである。

タイトルページには、このような長い題名が示されている。*War with the devil or, The young man's conflict with the powers of darkness.*

In a dialogue. Discovering the corruption and vanity of youth, the horrible nature of sin, and deplorable condition of fallen man. Also, a description, power, and rule of conscience, and the nature of true conversion. To which is added, an appendix, containing a dialogue between an old apostate, and a young professor worthy the perusal of all, but chiefly intended for the instruction of the younger sort. 「悪魔との闘い、あるいは、ある若者による闇の力との衝突。会話形式。若さゆえの腐敗と虚栄、罪の恐るべき性質、墮落したものの嘆くべき状態を知る。良心の姿、力、支配、そして誠の回心の性質をも描く。それに加えて、すべての読者、とりわけ若い読者の教育を意図して書かれた、年老いた背教者と若き信仰告白者の会話を含む付録がついている。」このタイトルから、この作品が若者の心の葛藤を描く宗教的作品であること、とくに若い層をターゲットにした教育的意図が込められていることが読み取れる。

出版回数と部数、執筆の意図に着目して、本論考では非国教徒詩人としてのベンジャミン・キーチの代表作のひとつである『悪魔との闘い』の特性を分析し、執筆と出版に関わる背景を考察しながら、後継の作品への影響力を論じる。

1. 『悪魔との闘い』の出版と受容

『悪魔との闘い』を1673年に出版したのは書籍商ベンジャミン・ハリスであるが、その後、ESTCに収録されているだけでも、1795年まで出版は続いている。その中からここで触れておきたいのが、1760年出版の「改訂版」である。タイトルページには、*War with the devil: or the young man's conflict with the powers of darkness; displayed in a poetical dialogue between youth and conscience. Wherein is set forth the Power of Corruption, and the Nature of true Conversion, in all its various progressive Steps.* と、原作とは異なるサブタイトルが示されている。著者については、*Originally written by the late Rev. Mr. Benjamin Keach. Now revised*

and greatly improved by another hand. と書かれ、キーチは原作者として紹介されているものの、匿名の筆者によって手を加えられた改訂版ということがわかる。さらには、“Necessary to be read in all Christian Families” という一行が添えられ、家庭向けに、おそらく幅広い意味でのキリスト教信者のために書かれたことが推測できる。

出版を手掛けたのはトマス・ラックマン (Thomas Luckman) で、地方都市のコベントリーに居住する、書籍を主に扱うビジネスマンであった。宗教的書物を中心に、18世紀半ばに数十点の書物を扱った。一方、改訂版を実際に書いた“another hand”が誰の手を意味するのか、氏名もわからず詳細は現時点では定かではない。だが、編者の序文で様々な事実が浮かび上がる。

その序文は、つぎのように始まる。

This book hath gone through many Editions, since its first appearance in the world; and I doubt not but it has been a chosen shaft in the quiver of the Almighty, and penetrated the heart of the most obdurate sinner.

For this purpose it was well aimed when first published by the reverend and pious author. But through length of time, and the improvement of language since then, the style is now become somewhat obsolete, and the poetry lame. And as this may probably be the cause why this excellent little book is grown so scarce, and has been so long out of print, the editor deems his revising the style, and correcting the poetry, in order to render it more useful in the present age, a sufficient apology for attempting its revival.²⁾

この書物が出版されたのは1760年とされるが、その時点で『悪魔との闘い』は過去に何度も再版を重ねており、宗教的影響力の大きい書物であったとみなされている。編者によれば、この本は、

かたくなになった罪びとの心を改めさせるのに一役買ってきたというのである。キーチのことは「尊敬すべき敬虔な著者」として紹介している。ただ、時の流れによる言語の変化もあり、『悪魔との闘い』の文体が古くさく、韻文としてもうまく機能しない書物となっており、長年絶版となっているということが指摘される。今の世の中に合うような改善が望ましく、さらに有益な書物として読まれるようにすること、それがこの改訂版を出した理由とされる。興味深いのは、編者曰く、「興味を引き付け、短時間で読め、わずかの代金で購入できる」ものである。また、当初、本編の後に収められていた年老いた背信者と若き信仰者のダイアログは削除された。この版がその後どれほど普及したのかは不明であるが、1760年以降に出版されたのは、改訂版ではなくベンジャミン・ハリスのオリジナル版を使用したものである。改訂版制作の意図は明らかであるが、その売り上げ、受容については引き続き調査を行う必要がある。

ESTCによれば、『悪魔との闘い』の初版は1673年、出版はベンジャミン・ハリスによる。ハリスは1670年代から1720年代にかけて英米で活躍した書籍商である。キーチと同様にバプテストであることから、出版を手掛けることになったと推測できる。ハリスはロンドンを基盤にしていたが、キャリアの途中で米国にも渡った。新聞を出したりするなど、活発な出版活動を展開した書籍商である。キーチの作品に関して言えば、『悪魔との闘い』以外にも複数の出版物を扱った。全体的に見て、オクテボ判が中心であり、つぎに小型のドゥオデシモ判が多い。一般に、クォート判の宗教的論争書もあるが、詩『悪魔との闘い』の場合はもっとも普及していたオクテボ判あるいは宗教書や多い廉価の印刷物に多いドゥオデシモ判で流通した。18世紀以降、たとえば1706年にニューヨークで出版されたものはオクトデシモ判、1709年にエジンバラで出版されたのはドゥオデシモ判であった。ハリスによる『悪魔との闘い』も、第12刷はドゥオデシモ判に変わっている。

ハリスは18刷までを世に送り出していることがESTCによって明らかであるが、仮にプリン

トランが500冊と見積もると、単純に計算して、1670年代から1720年代に英国で『悪魔との闘い』約9千部が流通したことになる。読者層はタイトル通りに絞られていて、比較的若い層についてもターゲットとしている。これについては次のセクションで考察を行うこととするが、40年間に、少なくとも約9千人の購入者、そしておそらくその家族の目に触れたと考えると、『悪魔との闘い』は当時の人々の生活や信仰、宗教観、文化の有様を探る鍵となるものと言える。

タイトルページの著者の欄には、1691年版から By B. Keach, author of *Sion in distress; or the Groans of the Protestant Church*. と書かれており、つまりキーチが *Sion in distress* の著者として既に認知されていたことが示されている。*Sion in distress* では初版（1681年）のタイトルページに『悪魔との闘い』の著者であることが示されている。このことから、双方の読者層が重なっているということが、出版時に前提となることが明らかに見て取れる。ただし、*Sion in distress* は論争的な書物であるため、必ずしも若年層に向けた教育的書籍とは言えない。

キーチと同じく王政復古期から多くの支持を得た非国教徒作家としてはジョン・バニヤン（1628－1688）が挙げられる。バニヤンの『天路歷程』（*Pilgrim's Progress*, 1678）は周知の通り、英国のみならず世界中で出版され、今なお読まれ続けている作品である。『悪魔との闘い』と比較する目的で、初版から18世紀にかけての出版状況を概観しておきたい。

『天路歷程』初版は1678年、出版者はナサニエル・ボンダー（Nathaniel Ponder）であった。ボンダー自身が非国教徒、独立派であり、出版物も非国教徒によるものを主に扱っている。

バニヤン以外では清教徒アンドリュー・マーヴェル（Andrew Marvell）の *The Rehearsal Transpros'd* の販売も手掛けた。バニヤンの『天路歷程』初版はオクテボ判であった。発売されるとすぐに大変よく売れたと見受けられる。翌年には第2版が出され、1679年の第3版では小型のドゥオデシモ判となった。その後、Part2が

1684年に出版された。『天路歷程』はバニヤン存命中にすでに11回版を重ね、18世紀にかけてはロンドン以外でもエジンバラ、グラスゴー、ブリストル、そして米国ボストンなどで広く出版された。1720年代までには22版を数えた。同じころ、『悪魔との闘い』は18刷まで世に出されている。それを考えれば、ともに時代を代表する作品として肩を並べていたと考えられる。ただ、これら2作品はいずれも非国教徒によるアレゴリーであるものの、『天路歷程』は現在まで途切れることなく出版がなされている一方、『悪魔との闘い』の人気は続かず、19世紀以降、現在に至るまですっかり忘れ去られてしまった。『天路歷程』は万人にとって読みやすい英語表現による散文作品であって、老若男女あらゆる年代の人々が読者として想定されることは明白である。しかし『悪魔との闘い』は、簡潔な英語で書かれているものの、読者は若年層を意識したものであった。『悪魔との闘い』の普及の限界はこのあたりにもあったのかもしれない。

2. キーチによる若者向けの読み物

キーチは若者に向けた宗教書を好んで書こうとした。その理由はもちろん教育のためである。讃美歌やカテキズムも若い世代にキリスト教の教えを広めるのに効果は大きいものであった。

キーチの『悪魔との闘い』においては、その冒頭に「本書の弁明」(In Vindication of this Book)という韻文が掲げられており、その中でキーチの意図が語られている。詩は散文と同様に神の教えを伝えるのに適したものであること、ダビデ王も詩人であったし、ソロモン王もそうであったように、韻文は古くから好まれてきたと言う。つまり、散文ではない宗教的作品を書くことを、そしてその効果を認めてほしいという意図が見られる。また、韻文で書かれたこの作品は、読者の魂を導くことを目的に書かれたものだとも言っている。すなわちこのことが示唆するのは、清教徒にとって、詩はむしろ遊びや娯楽といった性格が強いもので、真面目な宗教の教えには合わないという理解が主流であったということである

う。さらに、想像的物語作品についても、むしろけしからんという反応があった時代である。

『悪魔との闘い』はキーチが書いた想像的作品(imaginative writings)のひとつである。すると、韻文であり、さらに想像的作品であるという、受け入れがたい要素をあわせ持つ作品であったことになる。キーチによる想像的作品4点のうち、『悪魔との闘い』と*The Glorious Lover*が韻文で書かれている。『悪魔との闘い』は主人公が16歳であることから、とくにそのような年代の若者に向けた宗教書と考えられる。キーチの執筆の目的は布教である。“My Muse is dull, altho’ I have a Will”と言っているように、芸術性には自信がないようであるが、神の教えを若者に伝えたいという意図は確固たるものであった。そのことは、彼がプライマーに加えて、多数の讃美歌を書いたことから裏付けられよう。詩は耳に残り、記憶に残りやすい特徴があり、したがって神の教えを若者の心に刻む有効な手段となるのである。物語風に整えることで、教えはさらに読み手の興味を引くものとなり、教育的効果が増す。ゆえに『悪魔との闘い』はインパクトの強い教育ツールとなって、若者の記憶に残り、感性に働きかける作品であったと言える。

若年層を対象とする詩は、教訓的宗教的な意味を伝える、教育的なツールとして英国では17世紀に定着するようになった。キーチの『悪魔との闘い』は早期の例であり、一般により広く知られているバニヤンの『少年少女のための本、あるいは子どものための田舎のうた』(*A Book for Boys and Girls, or, Country Rhymes for Children*, 1686)に10年以上先んじて出版された。アルファベットや読み方の指示を含むこの作品は、プライマーとしても受容されたと考えることができる。

キーチはそもそも子どもの教育に関心があり、初めての出版物はプライマーであった。⁴⁾ 1664年に出版された“A New and Easy Primer”と題されたこの冊子は、幼児洗礼を否定する内容を含むため、キーチは逮捕されることになり、このプライマーは彼の目の前で焚書された。この冊子は現存しないと考えられているが、のちにキーチは

記憶を基に書き直して新たな冊子を出版したとされている。プライマーは英語の読み書き、一般的な知識教養を教える点で学校の教科書的な役割を果たすが、それに加えて、キーチのプライマーはカテキズムを含み、キリスト教信者としての正しい生き方を示すものとなっている。子どもを持つ親や学校教師に使用されたと考えられ、17世紀末にロンドンと米国ボストンで出版されたあと、18世紀になっても版を重ねた。

The Child's Delight および *Instructions for Children* というタイトルでキーチのプライマーは出版されている。当初の出版年は明らかでないのだが、広く読まれ続けた作品である。ESTCを参照すれば、後者については1763年の時点で第30版であることがわかる。たとえば1710年頃の版とされる同書のタイトルは次のようになっている。“Instructions for children: or, the child's and youth's delight. Teaching an easy way to spell and read true English. Containing The Father's Godly Advice, Directing Parents in a Right and Spiritual manner to Educate their Children. With A Scripture Catechism, Wherein all the Chief Principles of true Christianity Are clearly Opened. Together with many other Things, both Pleasant and Useful, for the Education of Children. Written by B. Keach, Author of War with the Devil. Recommended to the Use of all Parents and Schoolmasters, by H. Knowls” このタイトルから、1710年の時点ですでにキーチは『悪魔との闘い』の著者としての知名度を得ていることがわかる。実は1683年出版とされる *The Child's Delight* のタイトルにもキーチが『悪魔との闘い』の著者であるということが示されている。*Instruction* は、キリスト教の教えはもちろん、読み書き、親のための教育法、聖書の教えに基づくカテキズム、その他子どもの教育・成長のために有益な事柄を扱う書物であった。言語教育に関連することに加えて、度量衡の単位、四則計算の方法、領収書の書き方など、実務的な要素も含み、宗教的教育を施すだけでなく、子どもの職業的能

力をも育成するという著者の意図がうかがえる。子どもが成長し、信仰に生きるためには、職業生活を営み、社会の秩序を維持する必要が生じるため、プライマーの中で宗教的教育と世俗的教育が共存するのは当然のことと考えられる。思想的な面においては、*The Child's Delight* はタイトル自体に反カトリック教会の姿勢が表れているが、*Instructions for Children* ではタイトルから反カトリックの文字はない。⁵⁾

また、この冊子の最後には『悪魔との闘い』に似た短いダイアログ形式の詩が収録されている。若者 (Youth) と悪魔 (Devil) とキリスト (Christ) による言葉のやりとりであるが、『悪魔との闘い』と比較して、シンプルで簡易な英語で書かれている。より若い読者層を念頭に置いたことが推測できる。

3. 『悪魔との闘い』の特性

『悪魔との闘い』は寓意詩で、ダイアログ形式を採っている。主人公は「若者」(Youth) と名付けられ、他に登場するのは「良心」(Conscience)、「真実」(Truth)、「悪魔」(Devil)、「イエス」(Jesus)、「慈愛」(Grace)、そして「隣人」(Vicus) である。「若者」が回心するまでの心の葛藤を描く展開となっている。

多くの版において、冒頭部分には図1のような2点の版画が挿入されている。両方とも主人公である16歳の若者の姿を示す。見開きのページ、片側には“The youth in his natural state” もう一方には“The youth in his converted state” との記載がある。双方、年齢は16歳、同一人物であるのだが、服装から状況から全く異なって描かれている。一方の、つまり回心前の若者は、王党派風の衣類をまとい、羽根のついた帽子にロングのカーリーヘアという、ファッショナブルな雰囲気でもポーズを取っている。背景には楽しそうに遊ぶ男女の姿もある。しかし版画の最下部には火に焼かれ苦しむ様子の人々を垣間見ることができ、“broad is the way &c” との言葉が記される。まぎれもなく、新約聖書マタイによる福音書7章の “broad is the way that leads to destruction”



図1 *War with the Devil* (第12刷、1709より)

(滅びに通じる門は広く……) のフレーズを引用したものである。反対側のページには回心後の若者の姿があるが、服装は地味で黒いマントを着ており、左手には聖書らしき本を開いて立っている。街頭で説教をしているのかもしれない。空には雲から太陽が顔を出して彼を照らしているが、周囲には危険がたくさん存在している。悪魔は弓を構えて彼を狙っているし、大勢の兵士が彼に銃を向けている姿もある。中央には斜めに横切るように細く切り立った道があり、その上に、“Narrow is the way that leads to life” (命に通じる道は狭い)と書かれているのを読み取ることができる。つまり、回心後も人は常に悪魔の攻撃を受けること、宗教的弾圧にも脅かされることが暗示されている。常に誘惑に打ち勝たなければならないのはあらゆる人間に共通する問題であるし、宗教的弾圧に関してはキーチ自身が実際に体験してきたこ

とである。回心後の人生が必ずしも平穏でないことが、若者の足元の道の険しさにも暗示されている。この版画は複数の種類があり、版を重ねるうちに版木が傷み、新規に彫り直しが行われていたことは容易に想像できる。

作品の冒頭で、若者は自身の置かれた状況に満足し、世俗的な喜びを享受して、信仰の道には一切興味を持っていない。

At Cards and Dice and such brave Games
I'll play
And like a Courtier deck my self most gay.
With Periwig and Muff, and such fine things,
With Sword and Belt Goloshoes and Gold-rings.
Where Bulls and Bears they Bait & Cocks

do fight,
I do resort with speed, there's my Delight;
To drink and sport among the Jovial
Crew,
I do resolve whatever doth ensue.
And Court Fair Ladies, that I also love,
And of all things do very well approve.
Which tend my sensual Part to satisfy,
From whence comes all my choice
Felicity. (9)⁶⁾

このように、若者はいかにも享樂的な人生を送っている。カードやダイスは清教徒が避けてきた遊びであり、服装の好みは宮廷人のごとくである。男性用のかつらを用い、楽しい仲間たちと賑やかに過ごしている。女性と戯れるのも好んでいる様子である。敬虔な生活には縁がなく興味もない。そんな若者が回心する姿を描いたのが『悪魔との闘い』である。

若者が人生を謳歌しているところに、良心、真理、悪魔が順に登場する。良心は神の権威をも認めない傲慢な態度の若者に忠告するが、若者は当然聞く耳を持たない。なだめたり叱ったりしながら良心は若者の心を開こうとする。若者は自分自身が“in my youthful prime”にあると繰り返し、若いうちはやりたいことを十分に楽しみ、年老いたら信仰の道に戻ると言う。⁷⁾すると真理が登場し、長い説教を行い、若者の考えが誤っていることを指摘し、正しい道を説く。若者はそれを半ば理解し、受け入れるのであるが、信仰心が本物であって継続するものであるかどうかは疑わしい。良心と真理は若者に語りかけ続けるが、それを悪魔が妨害しようとする。長い時間をかけて若者は回心していく。最後まで悪魔の誘惑は続くのだが、若者は良心、真理、慈愛の三者に守られた人生を送ることになる。これは三位一体(父と子と精霊)を暗示すると考えられ、ようやく若者が心の平安を得るということを意味するものであろう。しかしながら、執拗な悪魔の登場は、読者に完全な安堵感をおぼえさせることを阻害し、むしろ緊張や警戒感をエンディングに残す効果を持つ。

Devil
My words I see no place at all can find,
Within the centre of thy evil Mind.
I'll leave thee therefore with my dreadful
curse
Which is as bad as hell, nay, it is worse
Thank all the plagues of the infernal lake,
And let all those who love me vengeance
take
Upon so vile a Wretch, and though I do,
Forsake thee now within a day or two,
I'll come again, and will thy Soul torment,
Till thou of thy Repentance shalt repent.
(92-93)

このように、作品の終わりは、人間の心の弱さ、信仰の揺るぎやすさを強く読み手に訴えるような内容となっている。

牧師であったキーチの目的は、この作品を通して、当時の若者を目覚めさせ、正しい信仰の道を歩ませることである。既述したが、若年層を対象にしていることがタイトルページにも示されているため、聖書の教えを詩の形で簡潔に伝えるものとなっている。18世紀になってからも出版は続き、世間に受け入れられてきた本であるので、当時の若者の心に響く力があつたことは確かである。ただし、ダイアログ形式とは言え、若者以外の登場人物に生き生きとした描写はない。抽象的であるのは他の作品にも共通していて、キーチの作品の特徴のひとつと言える。したがって、この作品『悪魔との闘い』がそれほどまでに支持された理由が何であつたのか、その理由を断定するのは困難である。当時の若者や家庭に向けて書かれた道徳的・教育的読み物が少なかったことも要因と言えるかもしれない。しかし、現在までの考察で具体的に判断するに至っていない。

上で触れたように、バニヤンも若者に向けた宗教的詩を書いている。キーチもバニヤンも聖書の教えを伝えることを目的としていたが、比較すればバニヤンの作品は少年少女にもわかりやすく単

純でやさしい英語を用いた作品となっている。『悪魔との闘い』が何十ページにも及ぶ叙事詩的な長編詩であるのとは反対に、一つひとつの詩が短く、詩集のような形式を採り、作品ごとに区切られている。バニヤンの作品には具体的描写が多いので、さらに理解しやすいものに整っている。一方のキーチは神の教えをそのまま伝えることに熱心で、抽象的な事柄を扱うことが多い傾向がある。また、一見して、バニヤンの詩集のターゲットは『悪魔との闘い』の読者層よりもさらに若い年代を含むものであったことが推測できる。現在ではバニヤンの『少年少女のための本』は、最初のこどものための詩集とみなされることもあり、高い評価が続いているのであるが、そのインスピレーションの元であったかもしれないキーチの作品が忘れられているのは皮肉なことである。

むすび

キーチは子どもあるいは若者の教育を念頭ににした作品を執筆している。『悪魔との闘い』は主人公が16歳であることから、おそらくティーンズを主な対象としたと考えることができる。一方のプライマーでは、カテキズムを行う子どもの年齢が3歳と4歳の間、という記述があるので、対象は幼児を含むものとなる。

『悪魔との闘い』は、その出版回数、出版年数から英文学史上意義深いものであると言える。これ以外にも人気を博した作品があるのだが、19世紀以来はキーチが非国教徒詩人のひとりとして文学史において取り上げられることはほとんどない。しかし若年層を対象にした文学作品を書いたパイオニア的存在として、キーチに関して、そして彼の『悪魔との闘い』やプライマーに関しては今後掘り下げた研究がなされる余地は大いにある。近世英国の若年層を対象とする文学作品の誕生と発展については、本論考で不足している点が多々残っている。同じバプテスト作家で世界的によく知られるジョン・バニヤンの『少年少女のための本』でさえも、キーチのプライマーよりも10年以上遅れて世に出されている。すなわち、キーチが『悪魔との闘い』やプライマーで築き上

げた子どもや若者を対象とする読み物の影響力は多大であったと考えることができる。それを具体的に検証しながら、本論考で不足する部分を補完する研究を今後継続して進めたい。

【謝辞】

本研究はJSPS科研費 16K13202の助成を受けたものです。

注

- 1) James Barry Vaughn は 彼の *Public Worship and Practical Theology in the Work of Benjamin Keach (1640-1704)* (Ph. D. diss., University of St. Andrews, May 1989) において詳しくキーチの創造的著作の意義を論じているが、一般的には讃美歌と幼児洗礼などに関するキーチの思想的部分を扱う研究が主流である。
- 2) いわゆるリトールド版であるが、Benjamin Keach, *War with the devil* (Coventry, 1760) p. iii. タイトルページには副題以下が次のように示されている。
“or the young man's conflict with the powers of darkness; displayed in a poetical dialogue between youth and conscience. Wherein is set forth the Power of Corruption, and the Nature of true Conversion, in all its various progressive Steps. Originally written by the late Rev. Mr. Benjamin Keach. Now revised and greatly improved by another hand. Necessary to be read in all Christian Families.”
- 3) Lynch, Beth. "Ponder, Nathaniel [called Bunyan Ponder] (1640-1699), bookseller." *Oxford Dictionary of National Biography*. September 23, 2004. Oxford University Press, Date of access 31 Oct. 2018, <<http://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-67702>>
- 4) 英国ではプライマーの歴史は長く、とくに言語学習のために出版されていた。17世紀には宗教的教育の目的によるプライマーが多く受容された。
- 5) タイトルに“Necessary to establish young people in Gods truth, in opposition to Popery, in these perilous times”との言葉が含まれている。
- 6) 引用部分に使用するテキストは、*War with the Devil* (1709年、第12刷)である。ページ数を本文中に示す。
- 7) これと同じ発想の人物が、キーチの『真の敬神の旅』(*Travels of True Godliness*)に登場する。